

## 看護学科学生の海外研修での学びと意義

—カナダ・バンクーバー、台湾研修報告—

白水 美保, 福岡 真理, 柿元 美津江, 木村 孝子

### 要 約

近年、看護の分野においてもグローバル化した社会に対応できる力を培える教育導入が求められてきている。本学の看護学科でも、看護学科ポリシーの中に海外研修定例開催という目標を掲げ、その実現に向けて大きな舵取りを始めた。今回、カナダ・バンクーバーと台湾の2か国を巡る海外研修を企画開催することができ、参加した学生達の貴重な経験と学びの機会となった。参加した学生達は、日本の看護の良い面や不足する面を改めて見え感じることができ、これまで学んできた日本の看護の常識を絶対的なものとして捉えず、広い視野で物事を考える機会にもなったことが海外研修帰国後のまとめ学習により明らかとなった。また、人は文化の中で暮らしが営まれていること、行政的に制度化された医療制度においても、それらが有効に活用されることの難しさや家庭環境が子ども達の精神衛生に大きな影響を及ぼし、社会問題へと繋がっていることなどが今回のカナダ研修で改めて学べ、考えを深めることができた。看護学生の海外研修体験は、グローバル化へ対応する国際的な看護能力の研鑽機会だけでなく、これから自身が進む看護、看護観へも影響し、実際に異文化に触れ経験したことは、自分自身の生き方や立ち位置の確かめ、自身の人生の糧となる大変意義深い経験になることが分かった。

**キーワード：**海外研修、看護学生、異文化

### I はじめに

近年、看護の分野においてもグローバル化した社会に対応できる力を培える教育導入が求められてきている。“人”を対象とする仕事に就くうえで、各国異文化の体験や国際的視野を持つことは、人間理解に繋がり、看護者としてもまた一人の人間としても大きな成長の糧になるといえる。

本大学においても、海外研修定例開催は看護学科ポリシーの中の一つとして存在し、その実現に向けて大きな舵取りを始めた。その動きから約2年の準備期間を要し、学科としては5年ぶりにカナダ・バンクーバー、台湾と2か国を巡る海外研修を企画開催することができた。

今回の海外研修に参加した学生たちの研修内容や実際に体験し感じたことを振り返り、これらをまとめるにあたり、看護学生の海外研修での学びとその意義が明らかになったため、ここに報告する。

### II 看護学科海外研修の概要

#### 1) 看護学科海外研修の目的

- ① カナダにおけるヘルスプロモーションの実際を学ぶ。

- ② カナダの人々の暮らしや健康観を視野に入れた異文化を体験する。

- ③ 国際的な視野及び語学への興味関心をさらに深め、今後の自己成長に繋げる。

#### 2) 研修場所：カナダ、バンクーバー・台湾

#### 3) 研修期間：平成29年3月3日～3月9日

#### 4) 参加者人数：看護学科学生7名

(2年生3名, 3年生2名, 4年生2名)

看護学科教員2名

#### 5) 引率教員：看護学科教員1名

(海外研修プロジェクト委員より選出)

#### 6) 企画準備：海外研修プロジェクト委員2名

#### 7) 研修行程

1日目：鹿児島空港出発、台湾台北桃園空港着  
台北市内研修

台北101, 中正記念堂, 北門, 龍山寺  
台北桃園空港からバンクーバーへ  
一日付変更線通過—  
バンクーバー空港着

2日目：バンクーバー市内研修(終日)

ギャスタウン, スタンレーパーク, グラビルアイランド, カナダプレイス,  
ブリティッシュコロンビア(UBC) 大学病院

## 3日目：ビクトリア市内研修（終日）

バンクーバー～ビクトリアへ船上移動  
ブッチャードガーデン，州議事堂，インナーハーバー，ロイヤルブリティッシュコロンビア博物館，  
クレイダーロック城

## 4日目：視察研修①

午前，バンクーバーの看護師協会視察  
午後，ファミリーリソースセンター視察  
交流会（現地医療従事者と夕食会）

## 5日目：視察研修②

午前，サレーメモリアル病院視察  
午後，ホスピス視察  
交流会（現地医療従事者と夕食会）

## 6日目：バンクーバー空港より台北へ出発

一日付変更線通過

## 7日目：台北桃園空港着

台北桃園空港から鹿児島空港到着後に  
解散

## Ⅲ 学習スケジュール

学習効果が得られるよう，研修前と研修後に分けて学習する機会を設けた。

## 1) 事前学習（事前学習の様子・写真①）

本海外研修へ参加するにあたり，海外研修の目的及び目標を，学生および保護者へ事前オリエンテーションの席にて説明し，周知した。

事前学習の内容は，カナダ・バンクーバー及び台湾の地図上での把握，研修先である医療機関・施設に加え，カナダ及び台湾の衣，食，住，文化，経済，健康観，医療等を調べまとめるよう課題を提示した。

事前学習の進め方としては，まずは自己学習を行ってもらい，次にグループ学習でまとめをしながら，自己学習での不足を補い，学習を深めていった。グループ学習においては，2年生，3年生は実習，4年生は国家試験対策期間という各学年のスケジュールがそれぞれ全く違うことから，平日に参加者全員が揃う時間をつくるのが難しく，土曜日を有効活用しながらグループ学習の時間を確保した。この研修前のグループ学習は，出発前のコミュニケーションを図る良い機会にもなり，学年を超えた団結力に繋がった。

次に，語学力向上を図るために，本大学のことばと文化学科教員の協力を得て，英会話事前レッスンが受けられるよう各学年別に英会話レッスンスケジュールを出発前の約2か月間組んだ。

## 2) 事後学習

海外研修終了後，全員が集合できる日程を調整

し，まとめ学習を行った。現地の研修施設で学んだことや，カナダ及び台湾の文化，医療，経済等の実際と事前学習内容とを照らし合わせ整理し，気づきや感想を各自がレポートにまとめ，海外研修担当教員へ提出とした。

また，これらの学習成果内容はパネルにもまとめ，本校大学祭の時に掲示し，学習を公表する機会を設けた。



写真①：事前学習の様子

## Ⅳ 研修成果と考察

1日目，鹿児島空港を出発し，台湾の台北桃園空港へ到着後，ガイド付き専用バスにて台北市内研修へ向かった。

台湾に到着後，近代的な桃園空港に圧倒され，さらに，始めに到着した台北101タワー（写真②）を見上げ，今まさに変換期で新旧混在した発展都市であると感じた。

次に，中正記念堂，北門，龍山寺（写真③）を巡った。中正記念堂では，独特な雰囲気のある軍隊交代式を見学し，台湾の軍統治下の歴史を感じた。龍山寺は，台湾で一番古い寺院で，祈りの時間になると多くの人々がこの寺院に集まり，熱心に祈りを捧げていた姿が印象深く，台湾の文化の中に祈り，信仰が深く根付いていることが感じ取れた。



写真②台北：101タワー前にて





写真③台北：龍山寺にて

台湾の台北桃園空港からいよいよバンクーバーへ  
一日付変更線通過バンクーバー空港到着

2日目、専用バスにてバンクーバー市内研修へ出発。  
まず、カナダの先住民の文化を感じることができる市立公園スタンレーパーク（写真④）へ向かった。公園には、先住民たちが築いた芸術ともいえる見事なトーテムポールがいくつも存在し驚いたが、高いトーテムポールの一番上の先端に納骨し死者を敬っていたとの説明を聞き、さらに皆驚いていた。『異文化の歴史の中、そこで生きる人々の慣習を知ることができ、文化の中で人々は生活し生きているのだと改めて感じた。それはとても大事な事であることと認識できた』『先住民の歴史、移民が多いカナダの文化を市内研修にて感じることができ、ワクワクし興味がさらに沸いてきた』と学生は後の感想で述べている。

その後、ギヤスタウンでカナダの街並みを見て、グランビルアイランドでカナダの広大なスケールの自然に触れ、カナダプレイスでは人々の暮らしの原点である食を学ぶことができた。移民が多いカナダの食は、多種多様な食文化であるが、食材として捕獲量の多いサーモンやメープルシロップ等が代表的で、マーケットにも多く並んでいた。

日本には日本食という食文化があるが、それは、日本の歴史文化の中で生まれ、長い年月を積み重ねながら継承されてきたとても貴重な文化であると、日本の食文化の素晴らしさを改めて皆感じていた。

次いで、カナダブリティッシュコロンビア（UBC）大学病院見学（写真⑤）へ向かった。カナダは州立の病院がほとんどであり公的な病院であることに加えて、患者の権利を特に重要と捉え、何よりも第一優先に考えている。そのため、病院見学は2人1組で患者に負担にならないよう配慮しながら行動した。病院内は自由に見学することができた。病院の壁には、所々大きな絵画が飾られ、病院の雰囲気が柔らかく感じられ、温かで優しい色使いからも患者を和ませる配慮がなされていた。

後の学生の感想文より、『車椅子が日本のよりもすごく大きく、外国人の体型に合わせたサイズをはじめて見た。とても驚いた。』『患者さんの人権を大事にしていることが分かり、日本と同じでとても良いことだと思った。』『あまり雑音、騒音が感じられなかった。環境面への配慮がなされて良いと思った』等々の言葉が聞かれ、しっかり見て学べていることが確認できた。



写真④カナダ：スタンレーパーク



写真⑤カナダ：UBC大学病院にて

3日目、雪が降るバンクーバーからビクトリア市内研修へ出発した。カナダは、イギリスからの移民者が多く、イギリス文化も多く存在しているところである。そのような歴史文化にも触れる機会になるよう、イギリス文化が多く残っているビクトリア島へフェリーで渡る研修プランを組んだ。

ビクトリア島到着後からは専用バスでイギリス庭園が広がるブッチャードガーデン（写真⑥）へ向かった。途中から小雨が降りだしたが、それぞれが開く傘が花のように広がりながら園庭を巡り、思い出深いものとなった。その後、雨は、降りだしては止みを繰り返した。カナダの天気は雨が多いが一日中降ることはないということも事前学習で学んでおり、実体験することができた。次にインナーハーバー、州議事堂、ロイヤルブリティッシュコロンビア博物館を見学後、昔、炭鉱で財を成した町の歴史を象徴



するクレイダーロック城（写真⑦）を巡った。



写真⑥カナダ：ブッチャードガーデン



写真⑦カナダ：クレイダーロック城

2日目、3日目は、カナダの文化歴史、衣、食、住、医療、経済、健康観などが少しでも多く学べるよう研修プランを立てた。この二日間は、市内研修ではあるが、看護の対象である“人”を理解するには、まず人々の文化や暮らしを知ることから始めなければならないと考え、その目的に沿って丁寧にプラン内容を吟味した。

また、この研修導入時期である市内研修の興味関心、好奇心は、後半の施設研修に繋がる大事な過程となり得るため、非常に重要と考えていたが、学生は、その思いに沿い、カナダの魅力にどんどん引き込まれ、興味関心を膨らませていった。時間が経つごとに顔の表情や目も輝きを増し、またそれだけでなく、行動や発言においても積極的な行動変化もみられるようになっていった。わずか二日だが、自己成長へ繋がったのではないかと感じられる場面も多く、これも異国において実際に自分自身の肌で感じた異文化の実体験の効果ではないかと思われた。

#### 4日目：視察研修①

午前、バンクーバー市内の看護師協会を視察（写真⑧）。ここではまず、カナダの文化について話があり、カナダの医療制度や看護師の制度について講義を受け、次に看護師の教育課程や就労の現状等の講

義を受けた。

カナダの文化については、事前学習でも勉強していたが、知らないことも多く、先住民を差別化して隔離施設に収容し、新しい文化へと馴染ませようとした歴史があったことや、先住民の人権を無視した行為がたびたび行われ、性的な暴力も多々あったという実態を実際に聞いて、学生達も驚きを隠せないようだった。それは、これまで先住民や移民たちが築き上げてきた新しい国であり、開かれた印象をカナダには持っていたからだと思われた。この話は、のちに過ちを認め先住民たちに謝罪をしたと続いた。過ちを認め謝罪するというのもカナダの人らしさということであった。

カナダの医療制度は、国民皆保険制度である。原則として患者の自己負担は一切なく医療費は無料であることは事前学習ですでに理解しており、医療制度としてはかなり優遇された中で人々は生活していると思っていた。しかし、人々の生活と制度を包括して考えてみると、色々な問題があることが分かった。

医療事情の最大の問題点は、病院までの交通の便の悪さと待ち時間の長さであることが分かった。そのため地域の家庭医をまず受診することが多いが、家庭医は患者制限を設けていいことになっているため、診察を断る場合もあるとのことだった。医療費無料というとても優遇された制度ではあるが、生活の中でうまく医療が循環していない実状もあることを看護師協会の方々からの講義で知ることが出来た。また、学生が驚いていたのが、看護師の57%という離職率の高さで、多くが人間関係を含む職場環境が原因で離職に至っていることや、カナダの看護師国家試験方法はインターネット方式で、時間制限最大6時間で基準点に到達した時点で合格とみなし、試験は途中であっても終了となることであった。

この看護師協会の研修で、カナダの歴史の良い面だけでなく、人々がどう生きてきたかや人は文化の中で生きているのだということを改めて感じることが出来た。また、カナダの医療制度及び看護師制度の実状を実際に聞いて、人々の生活と包括して捉える大切さを学ぶことができた。

午後からは、ファミリーリソースセンターを視察した（写真⑨）。このファミリーリソースセンターは、0～12歳までの子どもと13歳から19歳までの若者青少年の安全と健康を守るため活動しているところである。日本で例えるならば児童相談所と似ているが公的機関ではなく、州からの補助金と民間企業等からの補助金で運営されている。カナダの家族の現状や支援が必要な家族にどのような支援が行われているか、その支援の実際を学ぶために取り入れた研



修施設である。

支援家族が存在するのはどこの国でもあることだが、カナダにおいては離婚率 50%を超えていることや別居中の家族、それによる兄弟離散等の状況が多く存在しているという現状説明を施設の方から聞いて、学生たちはとても驚いていた。また、この日の午前中に看護師協会の方より、カナダは麻薬薬物使用者が非常に多いことから、止めさせることは状況的に困難であるため、せめて注射器の使い廻しによる感染症だけは避けるようにと注射器を配布しているとの話を聞き驚いていたが、カナダの家庭環境の実状と繋がり、妙に納得できた。

この施設は、ソーシャルワーカーが常駐しており、社会支援を上手に活用しながら支援は行われ、また、施設の中には、遊びのスペースや箱庭療法等のスペースもあり、精神面での支援も適切に行われていた。

質疑応答も活発に行われた。カナダ・バンクーバーにおいて家族支援はどの時期から取り組んでいるのか聞いてみたところ、問題が起きてから取り組んでいるとのことだった。続けて、日本は母子健康手帳というものがあり産前から母性を育み親役割獲得へ向けて産前から取り組んでいることを話すと、“その取り組みは、とても素晴らしい。カナダも是非そうすべきだ”と感銘を受けていた。

研修後の学生の感想において、『当然と思っていた日本の母子保健制度は決して当たり前ではなく、世界に誇れる制度であることが認識できた』『日本の家族支援が有るからこそ、日本は安全という今の社会環境が保たれているのではないだろうか』『日本も家族支援の課題は未だに多い。今の支援体制に満足することなく発展していかなければならない』

『多民族、多文化の中では価値観も違うため、すれ違いも多いのだろうか。支援も個別性に合わせるとなると難しそう』とあった。学生達は、日本とカナダの家族支援とその背景や文化の違いについて真剣に比較し考えていた。ファミリーリソースセンターでの研修は、今、目に見える問題だけが問題ではなく、根本的な解決にはどうあるべきなのかを深く広い視野で考える機会となったのではないかと考えた。

限られた時間の中、できるだけ充実した研修内容となるよう計画した交流会（現地医療従事者と夕食会）（写真⑩）においては、翌日に訪問予定のサレーメモリアル病院のマネージャーの方やカナダで看護師のライセンスを取得した日本人の方、現地で活躍している看護師の方をゲストに招き、夕食を囲みながら交流を図った。

学生も積極的に英語で会話をしたりジェスチャーを交えながら質問したり、有意義な時間が流れた。

気が付けば時間は 21 時を過ぎており、惜しみながら視察研修 1 日目を終えた。

学生から、『交流会がとても楽しくて良かった』『いろいろなことが緊張なく聞けた』『事前に英語レッスンを受けていたので、現地の人と少しお話ができて良かった』との感想も聞かれ、研修の時間的制限もある中、どのようにして研修を充実させ質を上げるか苦慮し考えた結果、交流会を企画したが、これは今後も海外研修の内容に是非取り入れたい内容である。

#### 5 日目：視察研修②

午前は、サレーメモリアル病院を視察した（写真⑪）。このサレーメモリアル病院は、1959 年開院当初



写真⑧：カナダ看護師協会



写真⑨：ファミリーリソースセンター



写真⑩：交流会1日目



は104床であったが現在では720床で、ブリティッシュコロンビア州で2番目に大きな病院である。このサレーメモリアル病院到着までは、バンクーバー市内からバスでおよそ2時間を要した。カナダの医療はほとんど無料で治療が受けられるが交通の便が非常に悪いという話を思い出しながらバスに揺られ到着した。

病院のロビーには、中央に大きなソファがあり、窓や廊下は広々としており、大きな絵画も飾られてとても解放感のある病院という印象を受けた。

到着後、病院の管理棟の中のカンファレンス室へ案内され、まず、そこで働く看護師から病院の概要、看護師制度等の説明を受けた。病棟の見学は、産科と小児科が有名であったため是非見学させていただきたいと交渉し特別に許可を頂いた。小児科外来は、1日160人の子どもが受診すると説明を受けた。精神疾患が多いとのことで、自傷行為等起こさないよう、また刺激を受けないように複数ある外来の診察室の一部は真っ白な壁のみの診察室となっていた。日本の小児科外来では見たことがないその異様な雰囲気のある部屋を見て言葉が出なかった。そのような部屋をつくるニーズがカナダにはあるという現状が何とも言えなかった。驚きを受けたという言葉では足りない、何とも表現しがたい心から湧き上がってくるような“重たい衝撃”と表現するのが最も近い気持ちかもしれない。

一方、小児科の病棟では、チャイルド・ライフ・スペシャリストが常駐し、子どもたちが家のような環境で入院生活送れているか、ストレスを感じていないをチェックしており、また、子どもたちが外で遊べるように広い中庭があり、そこに遊具も備えられ、子ども達が子どもらしく居られる環境づくりに力を入れていることが感じ取れた。

次に、産科を見学した。小児科病棟でもそうだったが、病棟に入るには鍵付のドアを開錠してからでないと入ることは出来ず、セキュリティがしっかり守られており、日本の精神科の閉鎖病棟の管理にどこか似ていた。

産科病棟に入ると、部屋は広めで、42床全部の部屋で分娩ができる構造になっているのにまず驚いた。分娩したその日もしくは翌日に退院するとの説明を受けると学生は更に驚いていた。分娩は病気ではないことから無料診療に当てはまらないため、自費での支払いとなっている。そのため金銭面を考えると早く退院することが望ましいが、分娩後の回復やこれから母乳が分泌し、育児の支援が必要とされる時期に退院となるのは、体調不良や子育てへの不安が増すのではないかと思われた。

また、最も大事なこの時期に子育て家族支援が行われていないことは、これまで施設研修で聞いてきたカナダの社会問題である麻薬常習者の多さや子どもたちの精神疾患の多さ、虐待の多さに繋がっているのではないかと関連性を考えさせられ、帰国後の事後学習の場においても同じように感じた学生が多くみられた。しかし、日本においても虐待問題等、大きな社会問題は山積している。もしかすると我々もまた大切な何かを見落としながら過ごしているのかもしれない。日本と異国の相違を見聞きする中で、日本という国をまた別の角度から見つめることができたことも今回の研修の大きな収穫であった。

また、今回施設研修においては、お礼と文化交流の機会になることを期待し、研修時間の最後に短時間ではあるがお土産を渡すセレモニーを企画した。プレゼンターは学生全員が体験できるように施設毎に予め担当学生を決めておいた。各施設へのお土産は、時期的に日本では雛祭りということでもあり、お雛祭りのタペストリーと手毬遊びの童絵額を準備した。日本のお雛祭りは、女の子の健康を祈り、厄除けの意味をもつことや、日本の子育て文化の中にある大事な通過儀礼の一つであること、手毬は日本の昔からの遊具文化の中の一つであることなどの意味を伝えたと感銘を受けられ大変喜ばれた(写真⑪)。

病院側からは、メープルシロップやクッキーのお土産を頂くなど、お互いに自国の文化を少しでも相手側に知ってもらおうと、双方に伝え合う工夫が見受けられ、有意義な交流の時間となった。



写真⑪：サレーメモリアルホスピタルにて



写真⑫：お土産贈呈“ひなまつり壁掛”



午後からは、ホスピス視察（写真⑬）へ向かった。このホスピスは、ブルームグループという非営利団体が運営する施設である。建物自体は、歴史的建造物に指定されており、自然の中に佇む静かな雰囲気あるコテージで、建てられた当初は孤児院として使用されていた。途中は少年院、その後は長い間空居となっていたところ、地域住民から「是非ホスピスをつくってほしい」との強い要望があり、14年前に現在のホスピスへと生まれ変わった。部屋数は、全室個室の10床で、内装にはモスグリーンの壁紙を使用し、高さのある窓が狭さを感じさせず、陽の光が優しく注ぐ居心地よい空間の工夫がみられていた（写真⑭）。また、生活の場でありながら、心穏やかに過ごせるよう、入居者との団欒や家族との面会時にも使用できる明るく広いラウンジもあった。ラウンジは屋根もガラス張りで自然の光を取り込む工夫がここにもみられ、建物に入った学生もその雰囲気に癒されていた様子だった（写真⑮）。

ここでは、医師、看護師、介護士、社会福祉士が患者と家族のサポートを行い、グリーフケアや人生の意味を一緒に考えながら過ごしている。また、運営資金は入居者が納める入居費用もだが、貧困の人も支えることを理念としているため、ボランティアコーディネーターの人を中心に地域でボランティア活動し、地域との繋がりを大切にしながら、地域民間から寄付金を得る工夫もしていた。

入居者は、余命3ヶ月頃に入居される。カナダは移民が多く多民族、多文化のため、その人の文化を大切に考えながら支援を行うことを心がけているとの説明を受けた。文化風習が混在していることは大変そうに思われたが、カナダではそれが日常的に当たり前として存在しているためか、困難さはそれほど感じてはいないようだった。同文化に慣れている日本だと異文化に対してどのような対応ができるだろうか。そういう意味でも、異文化に触れることは多様な文化にも柔軟に対応できる国際的なケアの感覚というものが身に付く良い経験になるのではないかと思われた。

ここでの看護師の仕事は、痛みはないか、呼吸状態、血圧の把握、吐き気や、便秘、不安等を観察し把握することだが、大切なのは、その人が全体的に快適に過ごせているかの視点であると看護師の方が話してくれた。“全体的に快適”という言葉が印象深く残った。また、廊下には旅立たれた方が旅立ちを前に残されたメッセージカードが厚く綴られており、このホスピス創立から14年間、多くの方がここで自分の人生を自分らしく生きて旅立ちを迎えられたことが分かった。

見学を終えるとホールへ案内され、施設の方とのディスカッションに移った。まず施設の方より、なぜ看護師を志したのか学生一人一人に質問があった。多少の間はあったものの、「はい」と学生の一人がずっと手を高く挙げ、堂々と語り始めた。それから次々に学生たちは積極的に自分自身のことを語り伝えた。相手の目を見てしっかりした口調で自分が看護師を志した動機や思いを語った。話す姿はとても逞しく見え、相手に自分の伝えたいことを伝えるという力強さを感じた。それは、海外研修の初めと比べると別人かのようで、明らかに学生の内面が変わったように感じた。



写真⑬：ホスピス“指定歴史的建造物”



写真⑭：部屋の中



写真⑮：ホスピスのリビングにて



ホスピスでの研修を終え、夕方からバンクーバー市内で2回目の交流会&さようならパーティを行った(写真⑩)。ゲストには、前日に視察させていただいた看護師協会の方が2名と韓国人でカナダで看護師のライセンスを取得し働いている方を招いた。交流会の席においても、若い看護師協会の方から、看護理念や看護教育についてしっかりした思いを聞いて、学生達は良い刺激を受けていた。また、韓国の方は、韓国で会計士として働いていたが、人間相手の仕事がしたいという思いから、カナダで看護師のライセンスを取ったという経緯を話してくれた。ゲストと話が進むうちに話も深まり、この交流会は、幸せは自分自身の心が決めるということや、自分にしかない人生が誰にでもあるということなど、人生の歩みというものを教えてくれた出逢いにもなったのではないかと思われた。

この交流会においても、『距離感が良かった』『たくさん聞くことができた』『ますますカナダに興味を沸いた』旅行ではできない貴重な体験ができた。『とても良い出逢いで、自分を見つめ直すことができた』など満足した感想が多く聞かれ、企画者が期待する成果まで達成できたと思われた。



写真⑩：交流会&さようならパーティ

貴重な人々との出逢いと大きく成長させてくれたカナダに感謝し、別れを惜しみながら、さようならパーティを閉じた。その後、ホテルで荷物を取るとすぐに帰国の途バンクーバー空港へ向かった。

6日目：バンクーバー空港より台北桃園空港へ出発  
一日付変更線通過—

7日目：台北桃園空港着  
乗り継ぎ便にて鹿児島空港へ  
無事に鹿児島空港へ到着し、解散。

## V まとめ

本海外研修は、冒頭にも述べた3つの目的があった。帰国後、参加学生に取ったアンケートにて、研修の目的は達成できたと思いますかの問いに、思うが6名・

思わない、分からないが0名・無回答が1名という回答が得られ、ほとんどの学生が、海外研修の目的は達成できた満足のいく研修だったと答えていた。

今回、7日間という研修期間に2か国を廻り、それぞれの国の異文化に触れた。そこに文化の違いはあっても、そこで暮らす人々が存在し、人々が健康に暮らしていくには、文化や経済、医療制度が大きく関わっていることを学生達は改めて実感し学ぶことができた。この体験は、きっと今後の自己の看護観へ良い影響を及ぼすであろうと期待する。

また、研修内容で一番良かったところを尋ねたところ、市内研修ではトーテムポールで先住民たちの息吹が感じられたスタンレーパーク、施設研修ではホスピスが大半を占めていた。また、交流会もすぐ良かった3名・良かった4名・ふつう0名と大変好評価であり、とても良い経験となったことが分かった。

山口らは、「日本で学んだことがすべて正解＝絶対的なものとする様子を見て、看護師が海外へ出ていくことによって、日本の看護を相対的に捉えられるようになり、創造性をもって柔軟に看護を考えることができるようになるきっかけになるのではないかと感じた。」<sup>1)</sup>と述べている。また、山本は、「海外の看護を知ることで、日本の看護の中の常識を絶対的なものではなく、相対化して見るができるようになる。海外を経験することによって逆に、より深く日本を知ることになる。」<sup>2)</sup>と述べている。

学生時代の感性豊かで好奇心旺盛な時期に海外研修を経験するという事は、人生の糧、そしてこれから自ら進む看護、看護観への影響、そして自分の立ち位置の確かめなど、未来の羅針盤となるものを得ることに繋がるのではないだろうか。7日間7人の学生と一緒に過ごし、日々成長し変化していく姿を目にして、若い時期に海外研修、異文化を体験する意義深さを強く感じた。

## VI 今後の課題

今回、海外研修の経験は、学生達の大きな学びの機会となった。しかしながら、看護学科の過密なカリキュラムの中での期間設定や費用面等での課題も多く感じた。今後の開催に向けては、企画運営管理上の課題も明確にし、安全でさらにより質の高い海外研修が継続開催できるように整えていく必要がある。

## VII 謝 辞

今回の海外研修が有意義で質の高いものになるようにと数多くのご配慮を頂いた現地の方々、ならびに海外研修の実現にご尽力いただいた先生方、そし



て何よりも参加してくれた学生達に深く感謝申し上げます。

#### 引用文献

1) 山口さおり，稲留直子，八代利香，新地洋之：学

生海外研修における大学教員の役割と今後の課題．  
鹿児島大学医学部保健学科紀 ;26(1):73-81, 2016

2) 山本則子：国際交流が看護系大学院にもたらす意義．看護研究 43(1)：19-23, 2010